The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「さんかふぇ」のこれまでとこれから : とよなか国際交流協会の方々と考える
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2012, 18, p. 2-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「さんかふぇ」のこれまでとこれから
―とよなか国際交流協会の方々と考える―

川崎　そんなに形式ばった仕方でやるつもりはないんですが、まず、一年やってきた「さんかふぇ」の印象に残った回とか、参加していてどう思った、というような、感想から聞かせていただければ。全部の回を振り返らなくてもいいので。

金　ざっくばらんに、「このときのこれがこう思った」とか、印象に残ったことから話していただいたら。色んなことが聞きたいです、ということで。いかがでしたか。

阿部　印象に残った回は、うーん、一回一回違ったから、どれが特別っていうわけじゃないんですけどね。あのときはこうだった、このときはこうだった、というような感じです。あのときは特別話が盛り上がったとか、あのときは失敗したとかじゃなくて、一回一回が多種多様で。今思ったら一年間も経ったのか、結構詰まっていたな、という感じですね。

■参加のしやすさ

マリア　私、最初は、何のテーマもなしで日本人も集まるのかな、ってすごくびっくりしたところもあったんです。私の経験では、ビラにしても、時間もあってテーマもあって当たり前。さんかふぇは、テーマなしの方が多かったんだけど、結局一時間、二時間も色んなテーマが出てきて話し合う。キャッチボールがちゃんとできる感じで。印象的というと、私が一番こわい思いをしたのは、映画のときに指摘されたとき。だけど、ああいう人もいるんだなって。

川崎　中之島の〔ラボカフェ〕*。

マリア　うん。あとは家庭で「今日はこんな話でしたよ」と報告していたら、主人も「参加したい！」と言って、〔参加後に〕今までにない集まりで、参加しやすいと言われた。やっぱり日本人もそういう風に感じるのかな、と。前も言ったように、フィリピンにいたときみたいな感じの場でした。初めて会った人でも、皆で話し合える。日本ではそんなにあんまりない。

岩崎　フィリピンでは結構ある？

マリア　よくある。普通。例えばネルソンさんの家で、誕生日会をしますって言ったら、誘われた人だけが来るんじゃなくて、プラス四、五人くらいついて来るから。ほんとに知らない人が話題に入ってくる。日本でもこういうことできるんだな、って思ったんですね。

阿部　さっき言った、回によって違うというのもあるんですけど、さんかふぇを始めて、去年の４月は、始めたっていうので関心があったり、デザイン５*で皆が協力しなきゃ、何かしたい、という思いで集まってくれたんですけど、さんかふぇはあまり目標を定めていなかったので、そういう人の期待を裏切ったというか、別にそういう場でもなくて。さんかふぇを設けるにあたっての事務局の意図みたいなものも結構関連していると思うんですね、一年の流れって。４月から始まって、最初は人数が多くて、三回目くらいまで二十人くらい来ていたんですけど、だんだん少なくなって、今やあまり広く告知をしていない。今どういう感じかというと、来てもいいし来なくてもいい。その代わり、来た人の中で自由にしゃべりましょうと。テーマも設定していないし、目標も設定していませんと。それが誰でも来られるといういいところでもあったり、その人の知らない面を見られるといういいところでもあったりするけれど、形の上で言ったら、参加する人数が集まりにくいというところもあったりして、その二つのバランスを取るのが難しい。

あとひとつ思ったのが、マリアさんの話にもあったんですけど、日本でもこういうことするんだな、っていうので。ブラジルに行ってきて*、日本では人対人で話すことがほんとに少ないな、って。あんまりしゃべっちゃいけないな、ただの挨拶程度なんだって。「元気？」「元気だよ」って、それくらいで。人と人との関わりがすごく薄くて、個人のプライバシーが強くて、壁が強くてっていう風に、すごく感じたんですね。で、それをぶち破るための「訓練」って言ったらおかしいですけど、それがさんかふぇの場でもあったんじゃないかなと思って。途中からは、人が集まらなくてもこういう場を続けることが重要なのかなという思いで、一カ月に一回定期的にやっていたんですけどね。なので、僕がこのさんかふぇで見たいのは、どれだけ人数が集まっているかとか、どれだけ有意義な話がされたとか、人がつながったとかじゃないものなのかな、他にもっといいことってないのかな、と思っています。

川崎　「ないのかな」というのは、あるだろうというか、見つかっている？　それ以外のいいことというのは。

阿部　やっぱり語り合いをするっていう感覚ですよね。あそこ〔C.C. カフェ〕*で〔2月に〕やったとき、皆で円になっていたら、すごく珍しがられていたじゃないですか。真ん中を横切るのをすごく躊躇されたり。それって一つの珍しがられる現象で、普通じゃないっていうことじゃないですか。それを普通にするっていうのはすごいことだと思うんですね。「ああいう語られる場があるのか！」って。そういう語られる場がないくらい、ちゃんと人と話してないのかなと思いますね。親身な友達とか家族とだったら話し合うけど、あまり関係ない人とか、仕事場とか、利害関係のある人とそんなに無駄な話はしないじゃないですか。そういう〔日本には〕ない機会のある場、あとはどんなささいな動機でも参加することのできる……。ある意味で参加しやすく

て、ある意味で参加しにくい場ではあるんですけどね。

岩崎　その「ある意味」っていうのは？

振り返りの様子

阿部　ある意味で参加しやすいというのは岩崎さんのことだと思うんですよ。参加していただいているし、さんかふぇを好んでいただいているし。でもそういう人がいるってことは逆に、参加しにくい人もいるんだと思うんですね。例えば利害目的でしか行動できない人、すごく忙しい人とか、「来てね」って言ったら「行かなきゃ！」と思っちゃう人とか。行っても〔さんかふぇは〕目的がないから、「何なんだ！」と思っちゃう人とか。そういうバランスが難しい。でも、いいかなって（笑）。両者が満足する場はないだろうし。

ネルソン　さっき阿部さんも言っていたんですけど、人にたくさん来てもらうことを目的にするのか、少ない人数でも必ず毎月来てくれる人がいるような場所にするのか。どっちかに決めなくてもいいのかもしれないですけど、どうしてもたくさんの人に来てもらおうとなると、逆にそれによって来にくくなる人も出てくるのかなという気がするんですよ。そうは言ってもやっぱり、何かを始めて継続するんだったらなるべくたくさんの人に知ってもらって来てもらうことも、それによって会が発展していくっていうのも分かるんですけど、その一方で、少ない人数かもしれないけれど、毎回とか、何回か回数が空いても思いだして来てくれる人がいる場所っていうのもすごく大事なのかなって。だからそこがすごく難しいというか……。

私が日曜日の朝にここでやっている日本語の活動＊も、きっちり勉強を教える場じゃないから、数にばらつきがあるんですよ。お出かけしますとか、お料理教室しますとか、企画をすれば人はたくさん集まるかもしれないけど、毎回違った人がたくさん来るより、二人とか三人必ず毎回来てくれる人がいるんですよ。二、三年ぶりにふらっと帰って来てくれる人が一人ときどきいたりとかして。すごく少ない人数かもしれないですけど、定期的に来てくれていたり、しばらく来られなくなっても、気にかけてくれて何かの折に戻ってきてくれる人がいるとか。私は個人的には日曜日にここでやっている「にちよう がちゃがちゃだん」っていう活動は後者の方にしたいって思っているから……さんかふぇはどうなのかなあって。

■さんかふぇと、自由に発言すること

川崎　哲学カフェはさんかふぇとはテーマが決まっているという違いがあって。哲学カフェ自体、ふだんの社会で言うと変な場所だと思うんですけど、そういう場ももちろんあっていいと思うし。で、さんかふぇってもっと変な場というか（笑）、テーマす

らないので。自由に発言する場っていうのは哲学カフェと共通していると思うんですけど、さらにもっと価値観とかが出てくる場所というのはさんかふぇの方が強いのかな、と参加していて思いますね。

ネルソン　マリアさんがお話しされたように、色んなことを言う人がいたりっていうので、私も正直自分がさんかふぇに出ていて、あれっと思う意見とか出てくることがあるんですよね。でも、この場は何か答えを導く場でもないし、その人の考えを変える場でもないし、その人を否定する場でもないっていう……私がわりとすぐに、その人がおかしいなと思ったら、そこを議論しようとしてしまうんですよ。それを抑えるのが大変なときは正直ありますよね（笑）。

そのへんが自分にもいい練習になるなあと思いながら……「あっ成長しなきゃ」って思ったりしながら。でもどうなんでしょうね、仮にその発言によってその場にいる誰かが不快な思いをしたというぐらいのレベルであれば、まあ私がそこまで腹が立ったことは今のところはないですけど、もしそういうときになったら、何でも発言していいですよっていうのを履き違える人がいたらどうなるのかな、というのはときどき心配になることはありますよ。

マリア　ここで年配の人たちと一緒にやったとき〔9月のミニさんかふぇ〕、すごく面白かった。あの日私一番ほっとしたな。

阿部　ほっとした？

マリア　ほっとしたっていうか、投げられた問題について自由にバーンって投げ返せたのがすごく……。

ネルソン　ありましたね、うん。

マリア　何ていうのかな、やっぱり人ってそれぞれの思いで、それぞれの考えでいたわけですよね。自分の思っていること、考えていることは出して、それで実際私もそこで納得できないことがあって、発言したのも…。

金　それはいつの？

阿部　あれはミニさんかふぇなんですけど、国際交流の話をしたんですね。参加していた全員がここで活動している人だったので、自ずと国際交流の話になって、全員が自分の考えを述べたんだけど、やっぱり全然違う。もう正反対って言っていい。そのときは二極に分かれて。僕もあのときほっとしました。結構いいバトルができて、最後にはよくまとまった……のかな？　まとまった気がして。すごく気持ちよかった。なんでだろうと思ったら、マリアさんのやった〔中之島での〕上映会のときも、あとは哲学カフェでも危ういなと思うときがあるんですよ。〔11月の哲学カフェで〕「男らしさ、女らしさ〔って？〕」で話し合ったときなんですけど、テーマが決まっていて、誰でも自由に発言したらいいという…さっきネルソンさんも、誰でも自由に発言できるっていうのを履き違える人がいるのがこわいって言っていたんですけど、その履き違えるっていうのはその場にいる人を傷つけてしまうようなことではないのかなと思っていて。例えば一つのテーマについて全員が話していたら、その人がいないものだと思って発言しちゃうから、女性がいるのにあたかも女性がいないかのように発

言してしまうっていうことが起こりうるのかなと思って、簡単に言えば危うさを感じていて。さんかふぇは哲学カフェと違ってテーマがない分、人と人との会話の中で発展していくから、人が必ず目の前にいて、その人と話しているわけじゃないですか。だからバトルも話が逸れずに投げ合いでできるのかなと（笑）。さんかふぇでも危うい場っていうか、自由に発言することを履き違える人はやっぱりいるとは思うんですけれど…。哲学カフェとの違いは、人とのコミュニケーション、人との間が深いなっていう風に感じますね。

■「聴いてもらう」から「聴く」へ

岩崎　哲学カフェってここだけじゃなくて違うところも行きましたけど、テーマから逸れたことはあんまり〔言わないし〕、自分個人はこう思うっていうのはあまり〔言わない〕。テーマ決めずにしゃべることもあるけどそんなに〔ない〕。逆に〔さんかふぇは〕テーマを決めてないから参加する方にとっては不安定なのかなっていうか、けっこう大変な部分もあるのかな、という。

金　そう感じられたことがあったんですか。

岩崎　決めてくれた方が前もって「ああ、これについて話できるな」とか。テーマを決めていないと、例えば参加している人で、ものすごく話す人がいると、極端な話、その人の時間になるから。自分も話したいのに。テーマを決めてないと色んな広がりになるから、ついていくのが大変だったり、自分も聴かないとダメだから。テーマを決めていたら、関心のあることないことって〔分けられる〕。基本的に、空間というかそういう場を共有しようというのがさんかふぇのコンセプトだったような気がするんですけど。それがいいという人もいるだろうし、一方的に、独演会じゃないけど、しゃべりたい人もいるし。

金　岩崎さんは自分自身をどちらだと思いますか。しゃべりたい方か聴きたい方か。

岩崎　最初オレンジショップ＊でやったときは緊張もしていたし、どんな人が来るんだろうっていうことで、一回目はけっこうしゃべりましたけど、慣れてくると、自分の言うことも大事だけど、初めての人も来るから、やっぱり聴いて自分の意見も言った方がいいっていうので、わりと割合というか、変わってきましたね。

金　緊張しているとおしゃべりになると。

岩崎　しゃべると、聴いてもらっていると安心するじゃないですか。だから、一回目のときは聴いてもらう方が多かったです。慣れてくると、さんかふぇの場合だと年配の人も若い人も来られるし、それを聴くということも大事だなあという。で、言ってもらえると、ああ、こういうことを考えているんだ、とか、こういう問題があるんだ、とか。

3月のさんかふぇの様子

■テーマを決めないことについて

ネルソン　なんか、テーマを決めずに会話が途切れないのがすごいですよね。そのことにいつもびっくりするんですよ。途切れないどころか時間が足りないくらいだからすごいって。例えば友達同士で会ってごはんを食べながらしゃべるとかだったら、わざわざ今日この話しようとか決めずに会うじゃないですか、特別話したい大事なことがあったらこれ話そうかなって考えますけど。会って、そのときの会話から始まって、話が長くなったり話が変わったりして時間が経っていくじゃないですか。でも、顔とか名前は知っていてもさんかふぇ以外で一緒になることがほとんどない人たちと集まって、一時間とか二時間、誰からともなく話がずっと続いていて、沈黙の時間がないっていうのは、よっぽどこの人たちしゃべりたいんだろうなって（笑）。でもそれができるのは信頼感というか安心感なのかなって思うんですよ。

さっき、行き過ぎた発言があるとちょっと嫌だみたいな話をしたんですけど、正直それが続くとちょっともう来るのやめようかなと思うときは今までときどきあったんです。でも、結局そこで嫌な思いをしても、後日職員さんとかに「こないだのさんかふぇこんなんだったんですよ」みたいな話をして、そこですっきりするみたいなことができるって分かっているから来られるのかなって。だから私にとっては、この協会に関わっている人たちが来るさんかふぇというのが、安心して来られる要素の一つかなあと。他でやっている見ず知らずの人ばかりが集まるさんかふぇみたいなものに私は行ったことがないので分からないですけど。……顔が見られるから話しやすいっていうのは〔ありますね〕。だから、別にテーマがなくても私は話せるかなって。テーマが邪魔っていうわけじゃないですけど、「何もないところから一時間とか二時間話せる私たち、すごい！」って私は自分で勝手に思っているんです。

川崎　哲学カフェと比べると、さんかふぇはデザイン５の一部として始まって、大阪大学でやることもあったけど、途中からはずっとここでやるようになったし、場所との結びつきが強いというか、参加する人もそうだし、話題も協会に関連することになることが多いし。で、話が途切れないというのはあるんですけど、さらにすごいなと思うのは、別に全員がしゃべらないといけないわけでもないのに途切れないということですね。僕はあまりしゃべらない方なので、一度もしゃべらないさんかふぇもたぶん四回くらいあるんですけど、それでも続いていくし。しゃべらなくても居ていいという気持ちをもてる数少ない場所というか。仮に初対面の人ばかりの場に行ったとしたら「しゃべらないと」という気持ちになるだろうけど、さんかふぇだとあまりならないなあという感じですね。

岩崎　しゃべりたくないというか、しゃべるのが得手じゃない人にとっては、しゃべらないといけない集まりに行くとそれが苦痛にもなり得るから。そうかといって、どこかに行きたい気持ちもあるわけで（笑）。しゃべらなくても、別に来てもいいよって

いう。コンパなんかに行くと、しゃべって場を盛り上げてっていうのがあるけど、そういうのが嫌いだという人も実際いるし、でもそういう人もどこかに参加したいというか、グループに属したいっていうのもあるし。なるほど。

阿部　僕も哲学カフェに初めて参加したときって、三回目ぐらいまでは勝負だったんですね。「なんか言わなきゃ！」って（笑）。同じボランティアも出ていて、他の人も発言しているから、「ああ、あいつ発言しよった、すげえ。僕もなんか言わなきゃ」みたいな。知的な場で、賢いこと言わなきゃって、すごく思っていた。大学生のときだったんですけど。川崎さんの言うとおりに、さんかふぇではそれがないのは、ただ僕は何回も参加して慣れているのか、それとも知的な発言じゃなくてもなんでも言っていいのか、言わなくてもいいと思わされる何かがあるのか、だと思います。そういう意味で、居ていい場所っていうのが一つの居場所なのかなっていう。

あとひとつ、共通点を見つけられる場所なのかなっていうのもあって、さんかふぇの価値観っていうんですか。一回さんかふぇをやったときに、どうしても僕とミーティングをしなければならない大学生がいて、でも僕はさんかふぇがあるからできない、もししたいならさんかふぇ待って、さんかふぇ来て！って〔言って〕、出てもらって。あまり積極的じゃないような子だったからどうかなと思ったんですけど、最後まで話を聞いて、最後には共通点を発言してくれて。何と言ってくれたかって、「面白かったです」って。「こういう場がない、珍しい場というのでも面白いです」っていうのもあったんですけど、「全然年齢が違う人と同じような考え方があって、同じように話せるとは思わなかったです」っていうのがあって。そこが今よくやっている、なんとかカフェとかなんとかサロンとの違いなのかなと思います。マリアさんも外国人が何人か集まったときに、やっぱり皆同じような経験しているんだなっていうことをおっしゃっていたので。少ない意見の集まれる場でもあるのかなと思っていますね。

金　哲学カフェはやっぱり僕はしゃべりやすいと思ったことはあまりないですね、正直なところ。哲学カフェは今のところ、阿部さんの思いに近いなっていう気がして。哲学カフェとさんかふぇとが全然違うなって思うのは、いつの間にかしゃべっている感が哲学カフェにはないんですよ、僕の中では。さんかふぇはいつの間にかしゃべっていて。自分、何を言っているんだろうなと思いながらしゃべっていることもよくあるので。別にそれでもいい、皆が聞いてくれているっていうのがありがたいし。友達との会話もポンポン続いたり冗談を言い合ったりして楽しく時間は過ぎるんですけど、そういうときとはやっぱりしゃべることが違うし、しゃべり方も違う。自分の結構悩んでいることとか、ひっかかっていることとか、そういうものの周りから勝手にしゃべっているというのは、友達との会話でもほとんどないし、そういうことをいつの間にかしゃべらされているという経験

が、僕がさんかふぇに来たいとずっと思っている理由の一つなのかな。

■肯定と否定

岩崎　肯定もしないし、否定もしゃべっていてされないので、そのへんが面白いかなとは。

川崎　そうですね。さっき阿部さんが共通点の話をしたんですけど、いつも共通点が見つかって「やった！」みたいな感じで終わるかというと、そういうときもあるし、お互い違う意見で、どちらかが勝ちとか、どちらかが正しいということで終わるんじゃなくって、「違うね」というので終わることもある。否定し合って終わっているわけではなくて、お互いがお互いの意見を言って、聴いて、終わっている。聴いてはいるんだけど、自分の呑みこめないことを肯定して帰らないといけないというわけではないし。でも、聴くは聴いたと。そういうことが起きるというのはわりと珍しいというか、地味にすごいことかなという気がするんですけどね。

岩崎　意見は違うけど、最後まで聴いてもらっているわけだし、それは肯定されているのかなっていう気がしなくもないです。途中で中断して、「そんなのダメだよ」みたいな感じになるわけじゃないし。

川崎　そうですね。

２月のさんかふぇの様子

■支えと継続

阿部　僕の中でね、一回だけあんまり気持ちよく終われなかったときがあって。話が抽象的でうやむやになって、否定も肯定もできないような話がずっと続いて終わってしまったときがあって。前回〔２月のさんかふぇ〕なんですけど。どっちつかずな発言が続いて。「人生ってこういうものじゃないですか」「でも僕はこう思う」「そういうこともあるんですよね」っていうような発言が二人の間でずっと続いて、「どういうことですか」って聞いても、抽象的な〔答えしかなくて〕…。

今井　何がテーマだったんですか。

阿部　何の話だったか思い出せないくらい。

今井　たぶんネルソンさんが言っていたのは、そのときのことがすごくしんどかったって〔ネルソンさんは都合のためすでに退席〕。それはみなさんと同じしんどさか分かりませんけど、そのあとネルソンさんは私にすごくしんどかったって言ってきました。さんかふぇが二時間だけの時間ではなく、その後とかその周辺に協会っていうのがあって、活動がずっと続いていくっていうふうに捉えるのであれば、誰か職員あるいはここに来た人がその話を継続してするっていうので気分がよくなったり、落とし所があるんだったらいいけれども、さんかふぇの二時間でしんどくなった、気分が悪くなったっていう人がいた場合に、どうしたらいいんだろうっていう。

岩崎　しんどいっていうか…分からないので、言ってもらわないと。こっちが妄想と

いうか、イメージを膨らませていくんだけど、どこまで膨らませていいか、僕個人的にはね。もっとはっきりバーンと言って…

マリア　そうそう、遠回りの言い方をするから、何が言いたいんやって。「例えば」とか、その「例えば」も全然遠いところから引っぱってくるから。で、ネルソンさんが一回〔抽象的な話をしても仕方がないと〕言ったけど変わらなかったから……。

　でも、そういう人もどんどん参加してほしいなって。一回だけでは本人も気がつかないだろうし。あの人は引っぱりたいなって私思ったんです。何回も参加してもらって。多分本人も自分で上手に言えない。私もそうなんだけど。だけどさんかふぇに参加して、やり方を学んで……。

川崎　さんかふぇだとそれができるっていうか。例えば哲学カフェだとテーマがあるから、バッと集まってバッと解散するので、そのときに上手くいくかいかないかで、上手くいかなかったらそれで終わっちゃうんだけど、さんかふぇだと今言われたみたいに、そのときはあまり上手くいかない感じだったとしても、また次来てもらえばいいじゃないっていうことになるんですよね。今感動していました、「そうか！」って（笑）。

今井　それは思いますね。ここに来ている人を見ると、なんだかんだ言って、協会の他の事業には来ないけれども、そういう人とか〔も参加できるから〕。……懐の広さはありますよね。これ〔さんかふぇ〕は何回もあるんだっていうのでやっているので、一回限りだったら、やっぱり目標を作りたくなるし、皆が気持ちよく帰ってほしいとか思うと、ある程度こういう層には来てほしくないなとか、爆弾発言したらどうしようとか、いろいろ思うんですけど、〔さんかふぇでは〕よく分かってくださる方もいるし、継続してやるので、その中で人が育っていくという側面はあるのかな。それを受け入れる側も、どんな人であれ。だから、しんどかったって言う人が、しんどくなるのは仕方ないところもあるけれども、そういうのをどれだけケアしたり、減らしたりしながら、新しい人を迎え入れられる体制を作れるかっていうのを私は考えてしまうんですけど……そういうことを考えてくれる人が増えていったらすごいことなのかなと思って。

岩崎　例えば、今回のはきつかった、楽しかったって言ってくれるから、人で支え合っているから、いいんじゃないでしょうか。

今井　逆に言えばその人の支えがなかったら上手くいかないかもしれない。

岩崎　そうそう、一人で抱えて…。

マリア　だからここなんですよ、たぶん。さんかふぇが心の支えじゃないでしょうか。

今井　でも、新しい人が来るのを、怖がったり排除したりするのはしたくないんですよね。でも一人ひとりが傷つかないようにもしたい。そういう場を作りたいなと。やっぱり怖がるじゃないですか。こういう発言をする人は来てほしくないとか。それを怖がったらだめなんだけど、じゃあそういう発言があったときに自分は次にどうひとこと言うんだろうって、鍛えられますよね。

傷つく人がいっぱいいたとして、じゃあ私は何ができるのかということを考えさせられますよね、最初から排除するのではないやり方で。

阿部　今の話、テーマがないということにも関係すると思っていて、テーマがないからまず「この場ってどんな場？」と考えることができる。それは今〔もそうだし〕、終わってからも、今日どうだった〔かと考えることができる〕。それが何回も続いて大きな変化を生む。例えばさっき言われていた、何回も参加するうちに聞くことに徹するようになったと…。やっぱり前回参加していた二人も自分で分かっていると思うんです、「言えなかった」、「違うねん、もっとこういうことが言いたかった」って。だからもう一回参加してくれると思うんです。そのときはまた違う姿勢で来ると思うので、それはそれでいいと思うんですね。ただ、やっぱりあんまり独占されるというか話をされても困るので、コミュニティボール＊だけじゃないコーディネータも必要なのかな。

■コミュニティボール

金　阿部さんが、コミュニティボールを使いたいときと、使わないでおこうかなという身振りをされるときがあるのを見ていて、なんでだろうと思っていたんですが、その理由が聞けた気がします。

阿部　使わなかったときありましたっけ？

川崎　途中くらいから「今日は使わんとこうかな」って言ってから、やっぱり使ったことが二回か三回かあったような気がします。

マリア　でも、〔誰かがボールを〕持っている〔間はその人の言うことを聴くという〕そのルールがあって、上手に聴けたりするときもあるんですよね。初めて参加した人も、時間を与えられるから。

阿部　多分、僕もそんなに意識していないんですけども、使わんとこうかなっていうのは、当初さんかふぇの辛いところはテーマがない〔ということで〕、この場について皆が配慮してくれるという優しさがあるんですけど、自分も配慮しないといけないと。それで皆が皆緊張することがあるんですよね。あまり緊張しすぎたら発言しにくいんじゃないかとか、コミュニティボール持っているのが嫌じゃないかとか。〔ボールを〕ポンと前に投げるということもあったりするので。だからもうちょっと和らげたいという気持ちがあったんですね。でもあまり和らげすぎたら、ここは皆の場で、公共的なものに近いので、それが破られるときがあるから、今はやっぱりコミュニティボールは必要だし。最初の「さんかふぇ始めます」っていうひとことだけでも必要だし。前回は僕最初あんまり喋らなかったんです。あえてだらだら始めたんですが、それだとあまり皆の場っていうのを作れなかったんですね。

マリア　コミュニティボールの大切さ、私がこれ飾ろうかって〔4月のさんかふぇを開いた〕オレンジショップから持って帰ってきたのは、やっぱりそれぞれの思いを語りながら巻いていたから。じゃあ一年間このコミュニティボールだけかな、次何作る

のかなって考えてたりもしました。皆が作れるもの。

阿部　またなにか作るのもいいですよね。だって作るということにかなり意味があって、使うだけっていうのはね、結構〔関わる人が〕限られますよね。

マリア　そうです。だから皆が関われるようなもの。そして後に残って、一年目のさんかふぇはこれ、二年目のさんかふぇは、というように、このときの気持ちはこうだったなって、思い出させてくれる。

コミュニティボールを持つマリアさん

阿部　存在感はないんですけど、やっぱり大切。皆がちゃんと話を聴くというのは大切。何か新しいもの、作りませんか？

■「集い場」としてのさんかふぇ

今井　ちっちゃいときって皆学校から帰ってきて、皆で遊んだりとかしました？学校から帰ってきて、ここに集まったら皆遊んでるから皆で遊んで。そんなんがしたい。マリアさんが言っていた、人がよく集まる場所。

川崎　大人になると〔そういう場所が〕無い。

今井　テーマとか、何かがないと人が集まらないし、その話題でしか話してはいけない場所。人と出会うのでさえもお金払うじゃないですか。話したい人がいるんだけど、それはいま商売になっていますよね。

岩崎　〔さんかふぇが〕デザイン５の、集い場であればいいですよね。

阿部　〔「集い場」は〕デザイン５のテーマになってますね。

今井　でもだからといって個人的なプライベートの出会いというか、その話だけではない、そういう人達が話せる場所って無いですよね。私は職員だから、ここにいるとたくさんの人と出会うじゃないですか。だからわりと私の中でまだ満足しているかもしれません、そういう環境、人との出会いがまだ豊かにある環境にいるから。

阿部　目的がないと集まらないですよね。休憩時間に話すことのほうが楽しい。

マリア　すごく決められるんですよね。今また思い出したのが、日本の生活って箱に入れられたみたいな感じ。周りに合わせないと、自分だけ目立っちゃうと打たれる。でもフィリピンではいきいきした生活ができる、誰とでも仲良くできる。誰にでも話せる。日本だったら、やっぱり顔を見て人を選んで、話が変わってくるんです。

■来年度に向けて

川崎　コミュニティボールを作ろうかみたいな、次回のことも考えるような話になったのでよかったです。来年度のさんかふぇ。

マリア　今年できなかったことは、多言語のさんかふぇ。

今井　多言語、楽しそうですね。

阿部　できると思うんですよ。多言語といっても、英語だけじゃなくても、アイヌ語でもできそう。

金　日本語ネイティブの人が結局こういう場では日本語でしゃべっている以上は強くなっちゃうというか、それはどこかでちゃんと逆転させたいなとは思います。

マリア　ほっとできる場所をもっともっと作りたいなと思いますね。

阿部　向う〔ブラジル〕でも、全然通じるんですよ。ちゃんと目を見て、信頼を持って、自分が日本語しかしゃべれないよってことを言ったらむっちゃ通じるんですけど、あきらめられるんですよね、たまに。そのときにすごく悲しくて。なんで通じ合えるのに諦めるんやって。だから全然いけると思うんですよ。ゆっくり話すとか、ジェスチャー使うとか、通じ合うとか。

金　皆が非ネイティブの言語で話す、とか。英語だったらたぶん、少なくともここにいる人は非ネイティブ。

マリア　私、離れていても、さんかふぇには参加したいと思います。

今井　一年間で、さんかふぇというのができて、さんかふぇを好きになる人がちょっと増えてきて、嬉しいなと思うのと同時に、もっといろんな人が関わってくれたら嬉しいなと思う反面、こういう風な落ち着いた雰囲気とか信頼出来る雰囲気とか、だれかが傷ついたときにフォローできる体制というのが、ずっと残っていけるといいなと思います。いろんな人に来て欲しいけど、でも大事なものは残す。人が増えるというのは、今関わっていない一人のひとが加わっていくという感覚ですね。一対一で関わっていく感覚。誰でもよくてバッと広がるというよりは。例えば岩崎さんみたいな人が来年もう一人増えたら嬉しいな、みたいな。

マリア　まあ、これが「さんか増え」ですよね。

今井　これ使ってくださいね（笑）。

金　今日は長時間お付き合いいただき、ありがとうございました。

（3月16日、とよなか国際交流センター、コミュニケーション・コモンスペースにて）

注

以下、とよなか国際交流協会に関しては協会のHP（www.a-atoms.info）と公式facebook（www.facebook.com/toyonaka.kokuryu）を参考にさせていただいた。

* 中之島のラボカフェ：10月21日にアートエリアB1で行われた映像カフェ「日本在住フィリピン人の声を聴く」（ゲスト：平松マリア、カフェマスター：本間直樹）のこと。6月のさんかふぇで協会の広報活動を考える中で提案された。マリアさんが以前に作成し、フィリピンで放送された映像を観た後、参加者がマリアさんに質問や意見を投げかけた。日本在住の外国人について厳しい意見を述べる参加者もおり、マリアさんがここで「ああいう人もいるんだな」と語っているのはそのことを指す。

* デザイン5：「みんなでデザインする『協会（組織）・活動（人びと）・センター（公共空間）の5年』」の略称。2011年4月から5年間、協会がとよなか国際交流センターの指定管理者となったことを受けて始まった活動で、さんかふぇは「プロジェ

クト広報」、「プロジェクト公共空間」と並ぶデザイン 5 のひとつの柱である。

* ブラジルに行ってきて：阿部さんはこの振り返りが行われる前日までの約 3 週間、ブラジルで活動している NPO に参加しておられた。

*C.C. カフェ：事務局横のスペースのこと（p.2 のタイトル背景がその写真）。2012 年 1 月から、「外国人も日本人もぷらっと立ち寄ってほっとできる」カフェが毎月一回のペースで開かれている。

* 日本語の活動：協会では複数の日本語交流活動が行われている。ここでは後述されるように、ネルソンさんの参加する「にちよう がちゃがちゃだん」を指す。

* オレンジショップ：大阪大学コミュニケーション・デザインセンターの活動スペース。豊中キャンパス基礎工学部 I 棟 1 階にある。

* コミュニティボール：対話の参加者が円になって話しながら巻いた毛糸をボールにしたもの。詳しくは『臨床哲学のメチエ』17 号、p.18 を参照。さんかふぇでは 4 月に作成して以来、発言したい人がボールを持って話すというスタイルが続いている。

（構成：川崎唯史・金和永）

とよなか国際交流センターの掲示板。コミュニティボールの作り方（中央上）や、毎回のさんかふぇで話題になったこと（右側の小さい紙）が掲示されている。